

伊賀国種生における兼好終焉伝説の展開

*1) 島内裕子

要旨

江戸時代には、『徒然草』の著者である兼好が、晩年を伊賀国種生で過ごし、そこで没したとする説が流布していた。この説を反映して、種生という地名を題名にした『種生伝』という兼好の伝記が書かれた。また、伊賀国地誌には、兼好の墓のことが記載され、そこには種々の兼好伝の記事も載せられている。江戸時代には、伊賀国にある兼好の墳墓とされる塚が文学的な名所となっていたのである。芭蕉の弟子の服部土芳もここを訪れている。さらに近代になってからも、伊賀種生の兼好の旧跡を訪ねる人々は「種生探訪」とも言うべき、訪問記を書いているし、地元でも兼好の旧跡が顕彰された。

本稿では、種生の兼好旧跡を実地に調査し、地元資料も踏まえて、近世から現代にいたるまでの、種生における兼好終焉伝説とその展開を概観し、次の四点から考察した。第一に、種生常楽寺に現存する『兼好上人略伝』の紹介と、近世兼好伝におけるこの作品の位置づけについて。第二に、『標柱伊賀名所記』に書かれた兼好関係資料について。第三に、服部土芳における兼好と『徒然草』への関心について。第四に、種生を訪れた人々の探訪記と地元での兼好顕彰について。

以上の考察を通して、文学作品としての『徒然草』だけでなく、著者である兼好への関心も近世から現代にいたるまで、一貫してかなりたかかったことが明らかになるであろう。

はじめに

徒然草の著者である兼好の伝記については、ほとんどわからないのが実情である。近世以前に知られていた兼好の事跡とし

ては、わずかに『太平記』巻二十一「塩谷判官讒死の事」に書かれている、兼好が高師直のために艶書を代筆したものの失敗して師直の勘気に触れたことや、『正徹物語』において言及されている簡単な記述、すなわち「兼好は俗にての名也。久我か徳大寺かの諸大夫にてありし也。官が滝口にて有りければ、内

*1) 放送大学助教授(人間の探究)

裏の宿直に参りて、常に玉体を押し奉りける。後宇多院崩御成りしによりて遁世しける也。優しき発心の因縁也」、および、著者・成立ともに未詳の『吉野拾遺』に記載されている、兼好が木曾に結庵したがその後、諸国を漂泊して京都に戻ったことくらいしかない。

ところが、近世になって徒然草が流布するようになると、上記の三書に加えて、新たな数々の事跡を記載した兼好伝が、何種類も書かれるようになる。わたくしは、近世に書かれたそれらの兼好伝を総称して「近世兼好伝」と名付け、すでにいくつかの論文を発表してきたが¹⁾、本稿では、本年(平成十五年)五月に行った三重県青山町種生での現地調査を踏まえて、伊賀種生における兼好終焉伝説とその展開について、次のような観点から考察を行う。

第一に、三重県青山町種生・常楽寺蔵『兼好上人略伝』と刊本『種生伝』の関係について。第二に、『標柱伊賀名所記』における兼好関連資料について。第三に、服部土芳における兼好および徒然草への関心について。第四に、伊賀の種生を訪れた文人たちと現地における兼好顕彰の動向について。以上の四点を中心として、伊賀における兼好終焉伝説とその広がり論じたい。

一 常楽寺蔵『兼好上人略伝』の性格

現在、常楽寺に所蔵されている『兼好上人略伝』一軸は、著者である篠田厚敬本人が、かつて元禄の頃に種生を訪れて奉納した、と伝えられてきた兼好伝である。そして、この『兼好上人略伝』は、早く富倉徳次郎によって、「兼好上人伝記一卷(種生伝本文の写し)」と紹介され、最近の研究でも「彼(引用者注・篠田厚敬)の自著『種生伝』を書写し、軸装したもの」³⁾とされている。

今回、常楽寺住職・樋口有弘氏のご厚意により、調査させていただいた結果、『兼好上人略伝』と『種生伝』には、表現の異同が多く、この両書を同一視することは困難ではないかという印象を強く受けた。両書の比較の前に、『種生伝』の概要を述べておきたい。

『種生伝』は、篠田厚敬によって著された兼好の一代記で、正徳二年(一七二二)に刊行された。ただし跋文には元禄甲戌とあり、元禄七年(二六九四)にすでに成立していたこととなる。『種生伝』に関しては、拙稿「兼好伝説とその展開」¹⁾で、近世に書かれた一連の兼好伝の中での位置づけを行い、また、正徳三年版『種生伝』の全文の翻刻と内容に関する考察研究も拙著『徒然草の変貌』(ぺりかん社・一九九二年刊)に収載し

ているので、⁵⁾ここでは概要だけ述べておくことにする。内容は、卜部氏系図に始まり、兼好の人となり・小弁との恋の苦悩・萩戸での怪鳥退治・恋のゆくえ・堀河基具の死と延政門院一条との贈答歌・恋の露見と東下り・小弁の死と帰京・後宇多院崩御と兼好の出家・世の中の変化・木曾の庵と諸国放浪・双岡の無常所と徒然草の執筆・伊賀での終焉、からなる。

これらの記述の特徴は、単に兼好の事跡を列挙する方法をとらず、『兼好家集』の和歌を多数使いながら、物語風に書いていることである。この点が『種生伝』よりも早く、宝永三年（一七〇六年）に刊行された『兼好諸国物語』（閑寿著）と異なる。『兼好諸国物語』では、短いエピソードを列挙し、しかも兼好自身の伝記とは直接関係のない仁和寺の法師の話（『徒然草』第五十三段）なども書かれ、伝記としての統一性や凝縮力に欠ける。

このように『種生伝』は、近世兼好伝の中でも、文学的な完成度が最も高い作品である。その『種生伝』と比較して、『兼好上人略伝』はどのようなものであろうか。『兼好上人略伝』（以下、『略伝』と略称する）の全文翻刻は別の機会を俟ちたいが、本稿では両書の主な相違点を報告しておきたい。なお、両書の原文の引用に際しては、表記・句読点など私意に改めた箇所もある。

第一に、冒頭の卜部氏の系譜を述べる部分の表現がかなり違

うこと。たとえば、『種生伝』の書き出しは、「兼好法師のいにしへをたづね侍るに、むかし、あめつちのはじめに、国常立の尊の御弟、天御中主の尊と申すおはしましけり」である。これに対して『略伝』の書き出しは、「むかし、あめつちのはじめ、国常立の尊の御時に、天の御中主の尊と申すおはしましけり」となっている。『種生伝』で、「兼好法師のいにしへをたづね侍るに」とある冒頭部分が『略伝』にはなく、やや唐突な書き出しである。『種生伝』では、この書が兼好伝であることをまず明示しているのである。『種生伝』では「あめつちのはじめに」とある部分が『略伝』で「に」を欠くのはごく小さな異同であり、この程度の異同は全体にわたって多数あるが、『種生伝』で「国常立の尊の御弟、天御中主の尊」となっている箇所が、『略伝』では「国常立の尊の御時に、天の御中主の尊」となっているのは、看過できない異同である。また、この後の部分で、『種生伝』では「意美麻呂」を「おみまろ」と読ませているが、『略伝』では「いみまろ」となっており、兼好の時代に近くなつてからの人名でも、兼忠・兼親・兼政の官職名が『種生伝』では「神祇官長上」、「略伝」では「神祇伯長上」となっている。さらに兼好の父である兼顕についても『種生伝』では「皇大祖天御中主尊より、四十八世の後胤とかや」となっているが、『略伝』では「高太祖先天御中主尊より四十八世の後裔とかや」であり、表現が異なる。今挙げた例は冒頭部の主な異同である

が、卜部氏の系譜を述べる部分だけでも、かなりの違いが見られるのである。従来言われていたように、これが『種生伝』を
書写したものだとなれば、異同が多すぎるように思われる。

第二に、表現が大きく違う箇所があること。卜部氏系譜の部分では、一字・二字の違いといった異同であったが、兼好の伝記が詳しく物語風に書かれる部分になると、もっと大きな表現の違いが見られるようになる。兼好と小弁の恋が露顕するあたりの重要な場面である。なお、『種生伝』と『略伝』の表記や字配りの違いを示すために、この部分に関しては左記に、原書通りに翻刻した。

子 裕 内 鳥

〔種生伝〕かくれたるよりあらハなるはなし。人も

しりけるにや折々かよひたるかた

も。みそかになりぬ。しのひて行たれと

えあはてかへりきて。よみてつかハしける

しのふ山またことかたに道もかな

ふりぬるあとハ人もこそしれ

いかにしてか父権守此哥を見出で。うち

はらたち。いなかへつかハして。ひとまにこめ。

かたくまもらせけり。

〔略伝〕 () この部分は省略 () かくれた

るよりあらハなるハなし人もしりける
にや折々かよひたるかたもみそかにな
りぬ忍ひて行たれとあはてのミ帰り
きてよみてつかはしける

忍ぶ山またことかたに道もかなふり

ぬるあとハ人もこそしれいかにしてか

父権守此歌を見出でうちはらたち

やかてむすめをいなかへやりてひとまなる

ところこめかたくまほらせけり

傍線を付した部分の表現が大きく異なることに注目したい。また、和歌の書き方も異なる。『種生伝』では、和歌の引用は、二字下げて二行書きにして行頭を揃えて書き、本文の所々に入る和歌が一目で見やすい。一方『略伝』では、和歌を二字下げて書くが、行末まで来ると次は二字下げずに行頭から書き、その和歌の末尾に続けて次の本文を書いているので、和歌と本文が連続してしまい、読みにくい。

第三の大きな違いは、『種生伝』には挿絵が入っているが、『略伝』には挿絵は描かれていないことである。おそらく先に引用した畠倉徳次郎の「種生伝本文の写し」という記述は、刊本『種生伝』にある挿絵が、『略伝』にはないので、そのことを『略伝』には挿絵はなく、『種生伝』の本文だけを写したも

のである」という意味で、「種生伝本文の写し」と記したのであろう。

以上、略述ではあるが、『種生伝』と『兼好上人略伝』の相違を見てきた。両書にこのような大きな違いがあることを、どのように考えたらよいのだろうか。可能性は、大きく二通りある。第一の可能性としては、両書の表現・表記の違いが大きく、かつ『略伝』が元禄年間に奉納されたという説をも勘案するならば、『略伝』を初稿、『種生伝』を改稿と解釈すること。従来言われていたように、『略伝』は『種生伝』の本文を写したものである」とか、「自著『種生伝』を書写したものである」とか、「自著『種生伝』と『種生伝』が同一のものであるかのような誤解を招きやすい。

『略伝』を初稿、『種生伝』を改稿とする推測には『種生伝』の奥書が参考になる。この奥書では執筆自体を「元禄甲戌」としながら、実際に刊行されたのは正徳二年であり、その間に十八年もの歳月が経過している。この間の事情をどのように考えたらよいだろうか。わたくしは、この時期（一七一二年）に『種生伝』が刊行されたのは、『兼好諸国物語』の刊行（一七〇六年）に刺激されたことではないかと考える。すなわち、篠田厚敬は、『諸国物語』の刊行を受けて、しかしながら兼好の伝記を書いたのは、そもそもは自分の執筆の方がかなり早かった（一六九四年）ことを、この奥書で強調しているのではない

だろうか。『諸国物語』の出版を契機とする定稿『種生伝』の完成を想定するならば、なぜ刊本『種生伝』と異同も多く、挿絵も入っていない『略伝』が存在するのかという疑問にも応えられるだろう。つまり、篠田厚敬は、元禄七年に書き上げた『略伝』を、兼好ゆかりの種生の地に奉納した。その後、出版にあたり、推敲・改訂し、さらに『諸国物語』には挿絵も入っていることから、『種生伝』にも挿絵を入れて刊行したのではないだろうか。あるいはまた、『種生伝』刊行の一年前に各務支考の『徒然の讚』が出版されていることも関係があるかもしれない。

近世兼好伝の展開について現代の研究者が考究する場合、少なくとも刊行された兼好伝相互の関連を考える場合は、跋文などに書かれている年代よりも、刊行の順の方を重視するのがよいと思う。

第二の可能性としては、現存の『略伝』は、『種生伝』の著者篠田厚敬が書いたものではなく、他の誰かが『種生伝』によりながら書いたものであること。この可能性も捨てきれないものである。先には触れなかったが、現存の『略伝』一軸には、脱落箇所がある。それは、『種生伝』で言えば末尾近く、「世の中の変化」を書いた部分である。ここには兼好と頼阿の贈答歌（「米賜へ、錢も欲し」「米はなし、錢少し」の歌）などが含まれる。自著を一軸に仕立てて奉納したにしては、このような脱

落は杜撰すぎないであろうか。『種生伝』との多数の異同も含めて、現存常楽寺蔵『兼好上人略伝』を指して、「自著『種生伝』を書写し、軸装したもので、前記『徒然草拾遺抄』付記の最後に、『兼好略伝一卷』と記されるものに相違ない」（川平氏注3論文）とまで断定するのは難しいように思われる。わたくしとしては、現存『兼好上人略伝』が、元禄時代の奉納品そのもののように思えないのである。ただし、刈谷図書館蔵『種生紀行』には、不二亭凡聖が享保十四年（一七二九）に種生の兼好塚を訪れ、名主の小竹氏宅に保管されていた『兼好上人略伝』を脱落箇所なく、全文書写したものの（そこでは篠田厚敬の後の名を舟橋栄閑とする。）が記載されている。（国文学研究資料館所蔵のマイクロ・フィルムによる。）この『種生紀行』は、当時の兼好塚の様子、凡聖・翫酸の両吟、兼好画像の模写などを含む。本作品に関する論考は別稿を用意するとともに、平成十六年秋に三重県青山町で行なわれるシンポジウムで発表を予定している。

いずれにしても、『種生伝』と常楽寺現存『兼好上人略伝』の関係については、『種生紀行』も介在させながら、今後さらに詳しく比較検討が必要であるし、その際には近世兼好伝研究全体の中で考えて行くことが重要であろう。

二 『標注伊賀名所記』に見る兼好関係資料

前節で概観した『兼好上人略伝』や『種生伝』のような兼好伝が書かれたり、兼好塚を探訪する『種生紀行』が書かれたりすること自体、伊賀・種生における兼好終焉説の浸透が見られるが、それでは、伊賀国地誌においては、この点についてのどのような記述が行われているのだろうか。ここでは、伊賀国の地誌を集大成したものとして、『標注伊賀名所記』を取り上げ、当該箇所を全文掲げて、その内容を検討したい。従来の研究においても、『伊賀名所記』や『標注伊賀名所記』の当該箇所は断片的に紹介され、考察も加えられてきたが、ここでは、当該箇所を全文を示すことによって、「標注」部分で述べられている内容を紹介して、伊賀における兼好伝説の広がりや再確認したい。部分部分の限定的な引用は、全体を見失う恐れがある。

『標柱伊賀名所記』は、入交省齋（一七九六―一八六五）が編述した伊賀国地誌で、省齋による「はしがき」末尾に、「天保十とせあまり四とせといふとし 正月わか菜つむ日 やまぶきのや守一しるす」とあり、一八四三年一月の成立である。省齋は伊賀上野藩士で、初め小川氏、名守一、号やまぶきの舎など。伊賀上野藩士入交信安の養嗣子。他に後述する『校正兼好法師家集』などの編著がある。⁶⁾

以下の翻刻にあたり、句読点と清濁は、私に付した。また、本文の割注は、括弧の中に一行書きで引用した。また、「標注」部分は詳細であるので、適宜私意に区切り、番号を付し、考察の便宜を図った。

なお、『標柱伊賀名所記』は、東京大学史料編纂所所蔵のマイクロ・フィルムに拠った。

【本文】

国見山

名張のおくなり。此所のちかきあたりに、田井の庄といふ所に、兼好法師の石塔あるよし、至寶抄に侍る故、たづねまかりしに、田井といふ村のちひさき一村の杉の内に、兼好庵の跡とて、其跡侍る。石塔なども、爰にありけるにや。兼好は発心の後、此国にすみ給ひけるにや。頓阿なども、此所を行脚せられける。また、其頃ほひの事にや。

【挿絵】

「国見山 并 草蒿寺」

「兼好古墳」

【標注】

①国見山、今按、伊賀郡に属きて、上野府より五里、辰

巳のかた種生村にあり。准后記曰、国見山・草蒿寺アリ。信西法師、開基本願也。

②園大曆曰（卷第十八）、観応元年二月三日、兼好法師在伊賀、罹病之由、有其聞、発心随僧、尤可惜之由、上皇之勅二依、典薬院和氣清元趣彼地、且給米穀三十石。

③七日、自橘伊賀守成忠、馳使价奏云、沙門兼好法師、弥尤病難治トイヘドモ、典薬頭ノ薬服用之事嫌之。且又、生死無常之急者、桑門之喜所也ト、振頭諸薬不用之。依之、今一許之又米穀者、近村之土民ニ充行之云云。七日、二条良基公、潜称急病、籠居有之。是併兼好年来之和歌之友タリ。故为病問、伊賀国ニ潜立越之由、知人多也。

④吉田社司卜部兼頭四男、修行因縁兼好法師。既二歴三代。諷花月、吟雪日、感会者常離・盛者必滅之道理、而出神家東漂西泊、既十五歳。茲中頃伊賀守橘成忠、招之（成忠伊賀国荒木郷）。故趣伊賀国、居成忠之亭。居三年、通成忠之娘（中宮之少弁病患而里居十七歳）。しのぶ山またことかたに道もがなふりぬるあとは人もこそしれ。詠此歌、事頭、而兼好密出伊賀国、臻桑名、越木曾地、詠和歌。又見信濃更科月、詠和歌。往所有逸歌。東行事終、而又住吉田并並岡麓。成忠猶慕旧友之縁、而赦前罪、而招之。又趣焉。終結菴于伊賀国国見山麓田井庄、遂往生素懷云云。

⑤十八日、兼好卒。自成忠之許註進。上皇・主上并諸院

居、触縁度節御感涙、宸禁ヲナヤマサレ勅祛ヲヌラサル、ト云云。

⑥升一日、草庵ノ内ニ残ル処ノ者、唯古筆経・自筆之老
子経・源氏物語須磨明石之卷・神代卷二冊・反古手習之書
捨二包・墨衣二襲。其外者、唯平夕之宿衣之袈、食碗等也。
同宿之童命松丸、就良基之家司、猷兼好生前之一首并病中
之詠。あるかなき世のならばしもわすられてをくる、身に
は夢かとぞおもふ。なき人のこの頃おほき世や更につねと
しりてもをどろかれぬる。右者病中之詠也。ありとだに人
にしられぬみの程やみそかにちかき明ぼの、月。右生前之
歌ニシテ、去月廿八日詠之由、申上也。

⑦升五日、米穀五十石・鳥目二千貫ヲ賜リ、田井庄墓ヲ
キヅキ、遍照寺ノ僧ヲ召テ、其事ヲ被命。(伊賀) 国分寺
ニ葬事ヲ被勤之。

升七日、謚賜權僧都之官。

⑧好問齋云、国見山・草蒿寺ハ、准后記ニ出ル。天正ノ
兵乱ニ、国中ノ良民、此ニ屯スト云。種生村ニアリ。兼好
法師墓、草蒿寺ノ境内ニアリ。元禄年間、土民、此墓ヲ発
テタ、リヲ得、今ノ如ク築ト云。中古、古寺頽廢。元禄ノ
元年、僧龍雲再建シテ、旧名ニ依ル。近世、篠田厚敬ト云
者、弘融・頓阿・兼好ノ三像(刑部権大輔土佐光成画、左

工門督飛鳥井雅豊卿讚) 及兼好行状伝記等ヲ此ニ蔵ム。

⑨正祇云、元禄十七申年、兼好塚ノ地に菴ヲ結びて草蒿
寺と号す。願主名張平尾村徳蓮院第子龍雲建立成。

⑩今按、上に載し園大曆、観月楼御本には第十八卷闕て
此事みえず。故正祇が抄録したる本をもて引證しぬ。正祇
抄録本奥書に、右一冊乞于名張春日神宮寺之染筆而書写畢
貴僧之手沢永可弄而已于時享保八卯下旬杜若軒とあり。さ
れば、春日神宮寺に尋れど、いかゞなりけむ、紛失てなし。
若、此原本を尋ねえば、猶真偽をたゞし、考ふべくなむ。
さて、普通の園大曆十八卷闕たれば、後世好事のもの、
兼好の事を著しくせむための偽作ならむかと疑ふ人もある
よし。これもさることにて、予も未だ数本を校正したるに
もあらざれば、とり定めてもいひがたく、はた、陽月齋も
名にたゝる連歌師なるが、兼好は発心の、ち、此国にすみ
けるにやといへるさまの、いとたどたどしきうへに、敢国
社のことも今本(観月楼御本)にはずれたるを、正祇が抄
録本にしるしたるは、彼法師の事とともに、好事の徒の偽
作したる抄録本を写し、かともおもはるゝになむ。されば、
園大曆十八卷の真偽は、しばらくさしをきて、陽月齋は享
禄天文の頃の人なるべければ、此頃までは彼古墳はこゝな
りとさだかにいひ伝へけるを、其後、偏鄙といひ、打続さ
し乱世の後なれば、土民の掘崩までになれるなるべし。さ

るは、好問齋もいひ給ひつれど、新著聞集(卷二勝蹟篇)伊賀阿拝郡多羅尾村の内、国見山に吉田兼好墓あり。そのしるしに、松ありし。寛文七年、土民ども、塚をほりくずしてみれば、四面六尺ばかりに、刀をひしとつめ、其下に大小の瓶二ツありて、中に鏡をおさし^(マヤ)。此ころ、村中多く煩しま、神子をよせてき、しに、塚を崩せしとがめにてありしと云しを、地頭藤堂玄蕃殿聞たまひ、かばかりの旧跡を容易に掘べき事かとは、本のごとくにおさめおかれしとなり。洛西の双岡に無常所をかまへしと、みづからの家の集に記されしかど、もし其頃乱世にて、かゝる所へさすらへ行れしやらむ、いと不審しき事なり(好問齋云云と合せ考めれば、寛文と元禄と両度、塚を掘崩したるがごとくなれど、新著聞集は伝聞の誤にて、好問齋の説の正しきことは、いふまでもなく、多羅尾とあるも、種生の誤なり。また茶窓閑話といへる雑書にも、伊賀国種生庄にて乾坤塚といふ塚をほり崩しけるに、吉田兼好の塚にて崇をなし、といへる事をみたりしが、全文は記憶せず。こは、新著聞集にいへると同時の事なるべし。かゝるものにも、かく記したるは、此地に兼好古墳のありける證にて、家集にみえたる双岡は壽碑なること、論ふまでもなし)とみえたり。これらの趣をもて熟考ふれば、彼法師のこゝに住し事はさだかならねど、古墳の此地なる事は、世に著明しかりしを、

なほ、たしかにおもはせまほしくて、若彼抄録本は偽作したるにてもあるべからむか(敢国社の事をも記し、は、一条までにては信実とおもふまじきとのこゝろしらひなるべし)。されば、彼書(園大暦)に所見なきには拘泥はらずして、彼古墳は此地なるべくと定めぬ。

以上で、全文引用を終わる。途中の一行空白は、構成的に『園大暦(園大暦)』引用が終わって一段落ついた箇所、わかりやすくしたものである。

伊賀の地誌としては、古く能登永閑による『伊賀国名所記』がある。そこに記されているのが「本文」として最初に掲げた「国見山」の記事(ただし、「爰にありけるにや」まで)である。ここでは草蒿寺のことは書かれていない。草蒿寺と兼好の結び付きが出てくるのは、『伊水温故』(菊岡如幻著・貞享四年・一六八七年)の「国見山草蒿寺」の項においてである。そこに「兼好此寺ニテ住終(スミハツル)」と書かれている。^⑦なお、この「本文」全体の記述は、後述する『三国地誌』の「兼好法師墓」とほぼ同文である。

「標柱」の①で「准后記曰」とあるのは北畠親房の『伊賀記』のことである。「准后記」のことは⑧にも出てくるが、この⑧の記述は、『三国地誌』に拠っている。「好問齋云」とあるのは『三国地誌』の著者である藤堂藩士藤堂元甫のことである。な

お、⑧の記述は、『大日本地誌大系・三国地誌』で比べてみると、「三国地誌卷之七十五」に記されている「兼好法師墓」（陵墓の内）と「草蒿寺」（梵刹の内）の記事を総合したものである。ここに、先に取り上げた『兼好上人略伝』のことと思われる「近世、篠田厚敬ト云者（中略）兼好行状伝記等ヲ此ニ蔵ム」とあることに注目したい。『三国地誌』の成立は、宝暦十三年（一七六三）である。ここでは草蒿寺に篠田厚敬が『兼好行状伝記』を納めたと書かれている。

「標柱」の②から⑦は『園太暦』にあるとされる兼好関係の記事のうち、特に伊賀に関わる箇所が書かれている。②から⑦の記事は、後述する芭蕉翁記念館蔵「園太暦」と、表現や表記の細部において一致の度合いが高い。⑨に「正祇曰」とあるのは、土田杜若のことで、杜若は『伊賀名所記』（享保八年・一七二三年）の著者である。②から⑦の記事は、この杜若の『伊賀名所記』に書かれているものである。⑩は、②から⑦の記事を書いた経緯と、兼好塚に関する考察を述べている。

入交省齋の『標柱伊賀名所記』における兼好関係の記述の中で特に注目しておきたいのは、本稿の後述内容と関わってくる点で、草蒿寺に兼好が住んでいたとする伝承記事である。

三 服部土芳における兼好と『徒然草』への関心

松尾芭蕉の元禄元年四月二十五日付惣七（猿雖）宛の書簡は、『笈の小文』の旅の足取りがたどれるので重要」（萩原恭男校注『芭蕉書簡集』岩波文庫）と言われる手紙であるが、この手紙の末尾に「三月十九日伊賀上野を出て三十四日。道のほど百三十里。此内船十三里、駕籠四十里、歩行路七十七里、雨にあふ事十四日」と書いた後に、瀧・古塚・峠・坂・山峯を列挙している。その中で、古塚の筆頭に兼好塚、山峯の筆頭に国見山を挙げている。また、当時『園太暦』所載と信じられていた兼好伝関係資料の中から、兼好の伊賀在住時期の記述などを芭蕉が書写したのも残っており、この写真版は『上野市史・芭蕉編』（平成十五年刊）に掲載されている。

このように、芭蕉は伊賀における兼好伝にかなり深い関心を寄せていた。兼好伝への芭蕉の関心は、兼好が晩年を自分の故郷である伊賀で過ごしたことから発生したものであろう。同様な関心は、芭蕉の弟子で伊賀上野藩士だった服部土芳にもあり、土芳の場合は、芭蕉よりもさらに詳しい記述を残している。以下に紹介し、考察を加える記述は、土芳の『蓑虫庵記』から見出した、兼好関係の記述である。

兼好関係の記事は元禄二年頃から見られ、先に挙げた芭蕉の

書簡が元禄元年であったことも考え合わせれば、芭蕉や土芳たちのような伊賀の俳人たちにおける兼好への関心は、篠田厚敬による『種生伝』（刊行は正徳二年・一七二二年）の成立が跋文にあるように元禄甲戌（元禄七年・一六九四年）だとしても、それよりも早い時期における兼好伝への関心として注目すべきであろう。

なお、『蓑虫庵集』の引用は、富山奏著『伊賀蕉門の研究と資料』（風間書房・昭和四十五年）に拠ったが、表記など私意に改めた部分もある。

① 十五夜。田井の庄兼好法師の旧跡を尋る。霄少し降り、亥の刻ばかりに晴れたり。月冷し。雲かはる事度々、山中と云ひ、良夜と云ひ、古人をしのばぬ人も夜すがら寝ず。

月を見し人を月見のひかりかな
猪のみだるる形や月のくも

② 草蒿寺の跡、今は畑也
月添てかなしさこぼる萩すすき

③ 兼好法師の集に、ともすれば鳩のうき巢のうきながら身隠れ果てぬ世をなげくかなとありし。予も慎有りて思ふ事を

此度は鳩の浮き巢のなるやうぞ

④ 何某、専秀公の傍にかへられて、橋木公茶の湯に召されける時、床の一軸兼好が筆跡を予にたまふ。白木具に雪と菊を盛り発句すべしとあり。猶其の跡を生花せよとせめたまふ。興に乗じて皆仰せに应ず。

寒菊や雪に利休が指の跡

⑤ 三月尽、於袴庵、荷文興行、兼好の歌書の切、元政の枕など飾られけるに
行春や古人のこころふたところ

①は土芳自身が、兼好の跡を慕って元禄十一年（一六九八）八月十五夜に、田井の庄を訪ねていることが貴重な資料である。「猪のみだるる形」という言葉が句に出てくるのは、あるいは『徒然草』第十四段の「おそろしき猪のししも、『ふす猪の床』と言へば、やさしくなりぬ」という言葉も、遠く響いているかもしれない。

②は、①に続く部分である。ここに草蒿寺のことが出てくる。①の記述に直ぐ続けてこのような句が詠まれているところから、土芳は、草蒿寺に兼好が在住していたという伝承を想起しているように思われる。そして、土芳がここを訪れた頃、草蒿寺はなくなっており、畑となっていた。この句に「かなしさ」とあるのは、『徒然草』第三十段の「古き塚は犁かれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき」が踏まえられている

のではないだろうか。

③は、元禄十三年（一七〇〇）の句である。『兼好法師集』の歌に言及し、その歌を念頭に置いた句が書かれていることが重要である。近世において、『徒然草』がよく読まれ、兼好の伝記への関心も高まっていたのと比べると、『兼好法師集』自体への関心はそれほど高まらなかった。先に述べたように『種生伝』には兼好の和歌が使われているが、③に示されているように、自分自身の生き方を兼好の和歌と重ね合わせている例は、ほとんど見られない。服部土芳における兼好への関心は、『徒然草』や伊賀の旧跡にとどまらないものがある。

④と⑤は、やや二次的な資料になるかもしれないが、当時伊賀の文人たちの間で兼好への関心が高かった事例になると思う。どちらも茶席で、兼好の書が珍重されていたことを示すと考えてよいのではないだろうか。④は元禄十三年冬、⑤は享保十三年（一七二八）三月である。

服部土芳は、みずから兼好の旧跡を訪ね、兼好の和歌に心からの共感を示して自作に取り入れ、さらには彼の交友の中で、兼好の筆跡が茶席に飾られていた。これらのことは、当時『徒然草』がよく読まれるようになっていた時代の風潮を示すと同時に、やはり伊賀国の文人たちにおける兼好への特別な関心によるものであろう。

四 種生を訪れた人々と種生における兼好顕彰

明治以後、種生の兼好塚を訪れた人々は、少なくない。彼らは、どのように当地の情景を描き、ここでどのような感慨を持ったのであろうか。管見に入ったいくつかの事例を、時代の順を追って追ってみよう。それによって近代における兼好伝説の広がりが浮かび上がってくるであろう。

①【富岡鉄斎の兼好塚訪問と漢詩】 種生兼好遺蹟保存会による『兼好記念祭三重県史跡資料』（昭和四十七年六月）によれば、明治二十八年六月十一日に富岡鉄斎が、次のような「兼好塚を弔ふ詩」を詠んでいる。

層々山万壘、幽寂別乾坤、垣壞寺全廢、碑亡墳僅存、荒烟青草色、老樹杜鳴猿、浮世真如夢、今人濕淚痕

この漢詩の「碑亡墳僅存」は、「碑亡墳僅存」の誤植であろう。また、「老樹杜鳴猿」の部分の「鳴」の字は不鮮明で、あるいは「鵲」とも読める。『青山町史』の「第五編 中世Ⅰ・第四章 兼好法師考」（一六五ページ）では「老樹杜鵲魂」となっており、こちらがよいかとも考えられる。なお、この資料

では、この鉄斎の漢詩の引用末尾に「稲田家蔵」とある。

言葉は補ってこの漢詩の意味を取れば、次のようになろうか。まわりは山々が重なり、ここの静けさは別天地のようだ。寺の垣も壊れ、草蒿寺はなくなっている。兼好の碑もなく、墳墓のみが僅かに残っている。あたりは人家の煙も絶え、人里から離れた寂しい場所で、草が青々と茂っている。老木ではホトトギスが鳴いて、静けさがいや増す。浮世はまことに夢のごとく、わたしは、この荒廃した情景を眺めて、涙にくれるばかりである。

鉄斎がここを訪れた時の情景は、まさにこのようなものであった。季節は六月中旬で、青草が茂りホトトギスが老木で鳴いているという夏の季節感が詠まれている。それにしても、この漢詩を読むと寺（おそらく草蒿寺）もなく、かろうじて兼好塚だけが残っているように書かれ、全くの廃墟のような印象を受ける。漢詩特有の誇張表現なのだろうか。

②【地元有志による兼好碑の建設運動】 鉄斎の漢詩に詠まれた情景に関しての傍証となる資料が、明治三十三年に出された「兼好法師遺跡之碑建設費募集趣意書」¹⁰である。ここでは、当時の草蒿寺周辺の状況がうかがわれる部分を引用しよう。

而るに其の死後幾んど五百年、墳上の碧苔空しく露にぬ

れ、悲風蕭条として陰虫のすだくあるのみ。彼の徒然草を草せし草蒿寺さへ今は全く廃滅して、荆棘離々、断礎求むるに由なし。

この文章によれば、当時（明治三十三年）の時点で、このあたりがかなり荒れ果てていたことがわかる。そもそもこの趣意書は、「兼好法師遺跡碑」を建設するための費用を広く募るためのものであった。兼好の碑を建立する計画は、遡ること明治二十六年の段階ですでにあり、「土方宮内大臣の篆額、川田文学博士の撰文、巖谷一六居士の揮毫を請ふまで」になっており、実際、川田剛（甕江）の撰文もこの趣意書に付されている。したがって、もし明治二十六年にこの撰文の碑が建立されていたならば、明治二十八年六月にここを訪れた富岡鉄斎もこの碑を実見したであろうし、碑が建立されるくらいならば、その周辺も整備されていただろう。もしそうであったならば、先に引用した漢詩のような内容にはならず、むしろ地元の人々の兼好顕彰を称えるような内容になっていたかもしれない。

ところが明治二十六年に計画された碑の建立は、三十三年の趣意書によれば、「資金の足らざるを以て、彫刻建設の事に至らずして止む。爾後また勿々として七星霜を経たり。此の如くにして法師の墳は今尚ほ荆棘の中に埋没せられつつあり」というのが、実情だった。したがって、明治二十八年にここを訪れ

た富岡徹斎の目に映った情景は、おそらくこの漢詩に詠まれている通りの、荒廢した寂しい景色であつたと考えられる。

なお、先に引用した部分で「彼の徒然草を草せし草稿寺」となっている部分に注意しておきたい。兼好が草蒿寺に住んだという伝承は、『伊水温故』の「草蒿寺」の項に出ているが、ここで『徒然草』を執筆したとまでは書かれていなかった。にもかかわらず、この趣意書にこのように書かれ、後述する田山花袋の文章などにもこの説が遙かに反映しているようにも思われる。

裕子 内 鳥

③『兼好法師家集』の出版　なお、今触れた明治三十三年の「兼好法師遺跡之碑建設費募集趣意書」から、翌三十四年の碑の建立にかけての一連の地元の動きと関わる資料がある。それは、明治三十四年六月に刊行された『兼好法師家集』の存在である。この「おくがき」と、「おくがき」の直前に掲載されている入交省斎の文章を、国立国会図書館蔵『兼好法師家集』（特二二一五六五）によって紹介したい。この本は、奥付に「明治三十四年六月二十日印刷　明治三十四年六月二十五日發行　非売品　著者故人　吉田兼好　發行兼印刷者　豊住謹次郎　三重県津市地頭領町十九番屋敷」とある。引用に際しては、句読点・濁点を私意に付した。

伊賀の国境幽なれど、国見の山雪深けれど、兼好法師が名は深瀬川と共に遠く世にながれて、この山里に碑さへ建てられたるこそ、いともめでたけれども、法師が人となりはさらなることなればいはず。その芸能に妙なりしは徒然草、はた家集によりてしるにかたからず。つれづれ草は、早くより世にもはやされたれど、猶家集は知る人まれに、世に埋れたればとて、いまを距ること五十年あまりの昔、法師が五百年の祭いとなみしをり、上野町なるやまぶきの屋の翁より、一つの写本をたむけられたるが、宝物の中にありけるを、こたびとりでて、聚珍にもものし、碑をたつるに力をつくされし君たちに頌つこと、はなしぬ。あはれ、法師が名の是によりて、深瀬の川のますく、遠く世にながれなば、亦翁が跡を空しくせざるに、庶幾からまし。

明治三十四年四月

岡廻舎のあるじ
秀英しるす

「岡廻舎のあるじ　秀英しるす」とある秀英とは、種生神社社掌の小川秀英氏であろう。種生神社は、常楽寺の隣にある神社である。なお、小川氏は、「兼好墓碑建設経緯等覚」の記載者でもある⁽¹⁾。この覚え書きには、墓碑建設に尽力した人々に『兼好法師家集』を配布したことは書かれていないが、「おくが

き」を読むと、「やまぶきの屋の翁」すなわち先述した『標注伊賀名所記』の編著者である入交省翁による写本の『兼好法師家集』を「碑をたつるに力をつくされし気味たちに頌つ」ことにした、と明記してある。

「おくがき」の直前には、その入交省翁が嘉永二年の兼好五百年に際して記した文章も、併載されている。

此法師の身まかりし観応といふ年のはじめのとしより、ことしは五百年になむなれりとて、此わたりの風流人ら、詩歌の類を集めて草蒿寺に納めて、靈をなぐさめんとするよしき、て、おのれも本生の父微面翁より給はりて年頃もたる、かの家集の一冊を、こたび甥の洗花園にあつらへ、浄く書あらためて、たむくるなり。そもこの法師は、もと卜部の家に生れて、神に仕ふべき身の、四十すぎし頃、いまだ年わか、りしとき、ひそかにもものいひかはし、女の、身まかりけるかなしさと、年頃つかへたてまつりたりし上皇のかむあがりまじけるみわかれのなげかしさに、世をはかなくやおもひけむ、仏のみちにいりつれど、それはた、ふかくしめりしさまにもあらざれば、その行状のかずかずにつけては、かにかくに論ふ人もあれど、もとよりその世のありさまにもよりにて、よろずものうきかたより、世をのがれたりけるか。人のこゝろのうちを、いさ、かうちあら

はれたるしわざのかたはしもて、おしあてにいひさだめむは、いとあぢきなきことなりかし。よしや、下のこゝろはいかならむ、しりがたけれど、ふみかくこともつたなからで、手かき歌よむことは、その頃名に高くてやむごとなきあたりまでもめされつるよしなれば、一個の風流人なりとは、うたがひなかるべし。さて、徒然艸は、世にもてあそぶ人多けれど、家集はすりまきにもなりながら、此わたりにほもたる人もまれば、かの風流のいよく世に高きこえよかしと、おもふまゝに、かくなむおもひよれるを、されど、かの靈はいかにおもはむ。あな、おぼつかな。

嘉永ふたとせといふ年の三月 やまぶきのやどのあるじ
省翁によれば、『徒然草』は流布しているが、兼好の家集はこのあたりでは所持している人も稀であるので、父から伝来していた家集を清書して手向けたと記している。その写本を小川秀英氏が印刷刊行したのである。こうして、地元での兼好関連資料の発刊が行われたことは貴重なことであるが、この本の出版のことはあまり知られていないようなので、ここに紹介した次第である。なお、省翁が献本した『兼好法師家集』は常楽寺に現存する。

④【明治四十四年の訪問者】 明治四十四年八月二十日発行の

『三重縣史談會々誌』第二卷第六号には、「大西生」（同誌に健筆を奮っている大西源一か）による「伊賀旅行雜信」の第三信が掲載されているが、そこに兼好塚を訪れた時の模様が記されている。刻々と移り変わる臨場感溢れる写実的な文章によつて、明治末期の種生の情景がよく描かれており、貴重な現地報告と思われるので、やや長文であるが、種生訪問記として、ここに紹介したい。

阿保より街道を右に岐して種生村の兼好塚へと志し申候、其の間五十町、地図上にて見れば中々の難所と相見え候故、固より其の覚悟にて参り候処、今は溪流に沿ひて立派なる車道開鑿せられ、存外安楽なりしに却て驚き入申候、其の道は大宇川上を經るものと否らざるものとの両道有之、小生等は其の後者に依り候、路は絶えず断崖の上に通じ、脚下に溪流を瞰下し、時に老桜の路を擁するものありて、脚の進むを覚えず、いつしか種生の村に着し申候、学校の前より溪流を渡り小坂路を上下して役場の傍に出で、更に南すること十数町、坂路を上りて字国見なる兼好塚に達し申候、塚のある処は国見の西方小高き処に森林となり居り、傍に「兼好法師遺跡碑」と云ふ花崗岩製の立派なる碑石有之、川田甕江の撰文を刻まれ候、塚を弔ひ、傍の民家にて硯と水を乞ひて、拓本数枚を作り終りたる時は最早

夕方と相成申候、墓畔の眺望は南に首ヶ嶽三国山の崢嶸を仰ぎ、近く種生川の清流を俯瞰する幽邃の地にて、げに吉田兼好が居を卜しけむも理ある事と被存申候、其の遺蹟の傍に草蒿寺と云ふ一蕭寺ある由、書物上にて承知仕居候故、今夜は此の山間の一幽寺に宿して、大に詩的趣味を味はん筈にて参り候処事志と違ひ、寺はあれども現今は無住の由を知り、大に落胆仕候、詮方なく疲れたる足を引き擦りつ、種生の本邑に下りたる時は日は全く暮れ果て候、遅れ序に稲田久郎氏を訪ひて、元草蒿寺の什物を一覽仕候が何れも如何はしきものに候、稲田氏は村治君の知人にて宿泊をす、められ候へ共、固辭し、提灯の御無心を申し蛮勇を鼓して之より五十町の阿保駅へ出で申候、稲田氏を辭して間もなく雨となり申候につき、之には雨用意なき二人大に困却仕候へ共、幸に傘を借るを得て一先づ安心し、今回は川上經由の道路に依り、暗を衝き脚に任せて五十町の道を一時間に踏破し、只今阿保に帰着し、例の俵屋に旅装を解きたる処に御座候、兼好の生涯につきては異説多く、種生村に於ける其の遺蹟の如きも今後の研究を要するもの多々有之候、小生も此の事につき多少の意見なきにあらざれど、今尚研究の途上に有之候間暫し発表を見合せ、茲には単に俗伝のまゝを申述るに止め申候不

四月二十四日午後十時 阿保村俵屋にて

ここには、いくつかの点で貴重な記述が見られる。第一に、川田甕江の撰文「兼好法師遺跡碑」を実見し、拓本一枚を採ったこと。第二に、草蒿寺はあったが、無住なので、そこに宿泊できなかったこと。第三に、種生の町に戻って「稲田久郎氏」宅で、「元草蒿寺の什物を一覽」したが、いずれもいかがわしいものと判断していること。なお、ここで稲田氏の家とあるのは、①で引用した富岡鉄斎の漢詩が所蔵されている「稲田家」と同じ家であろうか。

⑤【田山花袋と種生】 田山花袋は、昭和四年八月に岡村書店から刊行された『名張少女』の「はしがき」に、次のように書いている。

私の作に名張少女といふのがあつた。嘗て博文館から出版せられた事がある。今度名張の書肆岡村君が、是非発行したいとの熱心な願。明治の文学を昭和に紹介する……まあ当今の一流行だと云つて笑つた。

名張へは数度行つた。赤目四十八瀑、香落溪、月の瀬梅溪等、此の町の周囲には天下の景勝が中々多い。史蹟にも相当富んでゐて、女人高野の室生寺も程近い。上野町には芭蕉塚がある。荒木又右衛門の仇討旧蹟がある。又兼好法師の徒然草遺蹟といはる、地が、種々生村にある等は世に

高い。(後略)

「種々生村」となっているのは「種生村」の誤植であるが、「兼好法師の徒然草遺蹟」といはる、地が、種々生村にある等は世に高い」とあり、この文章が書かれた昭和初期にも種生村が兼好とゆかりが深いことは名高かつたことがわかる。ただし、「上野町には芭蕉塚がある」と書いているのとは、微妙に書き方が異なり、「兼好塚」とは書いておらず、「兼好法師の徒然草遺蹟」といはる、地」となっていることに注目したい。この書き方のニュアンスとしては、種生村で、兼好が徒然草を執筆したかのような印象を受けないだろうか。

このことに関しては、青山町の地元史家・中義貫の『国見山と兼好法師……その伊賀終焉考』（昭和六十年九月・青山文芸社）に、『草蒿寺』の寺名は、兼好が徒然草や和歌の原稿を書いた寺として『草蒿寺』と書かれ、よばれたりしているが、正しくは『草蒿寺』なのである。草が蒿くしげるの寺名である』（五八ページ）と書かれていることも参考になろう。

この「草蒿寺」はすでに触れたように、北畠親房の『伊賀記』にもその名が見える寺であり、兼好が徒然草をここで書いたから「草蒿寺」と名付けられたわけではない。中氏も今引用した部分に続けて、北畠親房の『伊賀記』や土田杜若の『伊賀名所記』の記述を引用している。したがって、あくまでも、「草蒿

寺」を「草稿寺」と表記したりする訛伝に触れただけである。中氏の理解としては、「草稿寺」と書いて、あたかもここで兼好が徒然草を執筆したかのように思うのは誤りであることを述べているのである。ただし、このような記述があること自体、兼好終焉伝説が、同時にここでの徒然草執筆伝説も呼び起こしており、その背景となっているのが、「草蒿寺」という名前が「草稿」に音通することによるのを明らかにしているのである。地元での草蒿寺における徒然草執筆伝承があり、それが先に挙げた田山花袋の記述の微妙なニュアンスにも反映していると考えたい。

鳥 内 裕 子

⑥【富倉徳次郎の種生訪問】 早い時期に種生を訪れた国文学者としては、まず富倉徳次郎が挙げられる。近現代の国文学者は、種生における兼好伝説について自著や自論で詳しく触れることがほとんどなくなっている中で、富倉徳次郎は、実際に種生を訪れ、現地調査をしている。昭和十八年二月刊行の『兼好法師研究』（丁子屋書店）の「第一章 伝説」には、種生を訪れた時の様子が次のように書かれている。

山間を静かにしかし数丈の涯を左右の岸に造つて流れる前深瀬川を挟んで細長く延びてゐるこの村は、今も昔ながらに農業と養蚕とによつて平和にしかし細々と生活を営ん

である。村の中枢部を形造る種生と呼ぶ字はこの山間の村の中でも更に一段高い山の上に展けてゐる。小学校・村役場・種生神社・常楽寺等村の公共機関は総べてこゝにある。兼好塚のあるといふ国見山と呼ぶ丘はこの字種生の一区画から少し隔たつたこんもり小高い丘をいふのである。四五段の石磴をつけたこの丘は上が百五十坪の広さで、松や杉が鬱蒼と茂つて昼尚小暗い。丁度この丘から見ると南方に伊賀大和の境に聳える国見山（この土地の人はこれを尼ヶ岳と呼んでゐる）が正しく見えるのである。この丘の中央部に二三尺の高さの一坪程の塚が見出されるが、これこそ兼好塚であるといふ。もとより墓石もなにも残つてゐない。私が訪ねた時は村人の心やりか、山つゝ、じが供へられてゐた。土地の人はこれを「けんこうさん」と呼んでゐる。只塚の傍に明治二十六年三月、時の諸陵頭川田剛撰、巖谷修書の碑文を刻した高さ八尺余幅五尺五寸に余る大石が立つてゐるのみである。それには前述園太暦仕立の記事によつて兼好伝を記し、この塚を以て兼好の墳墓と見るべき由が記されてゐるのである。

私がこゝを訪ねた時は五月も末のことで、山つゝ、じが美しく咲き、数丈の松杉の林の中には楓や榊やねずの木の若葉が美しい事であつた。この辺は杜鵑を聞くによく、土地の人の手によつてこの丘の周囲はよく整理せられて国見公

園をなしてゐる。近年伝説名勝地となつたといふ。しかし兼好に関する限では一見してその土地柄といひ、その塚と云ひ、何等かの確実な証拠なくしては兼好と結び付ける事不可能なる土地である。

富倉は、今引用した最後のところで、「兼好と結び付ける事不可能なる土地である」と述べており、種生における兼好終焉伝説に対して懐疑的であるが、このような現地調査を行った上での発言であることが貴重であろう。

兼好伝説のことを研究書に取り上げても、現地調査までは行わずに書くことが一般的であつた。たとえば、富倉の研究以前のもので、『合評徒然草新解』（大正六年十一月刊・好文会同人・武島又次郎他）の「兼好法師伝」を執筆した鳥野幸次は、『国の花』（大正十五年九月・中央歌道会出版）に掲載されたエッセイで、次のように述べている。なお、この引用は、先に挙げた『兼好記念祭三重県史跡資料』の巻末添付資料による。

大正六年に、好文会同人の合評徒然草新解を出した時に、私は其の附録にする兼好法師伝を書いたのであるが、其の中に伊賀国見の麓、田井庄奈保村（今の種生村）に兼好の墓と伝へるものがあり、所の人はケンコン塚といふ由を録しておいたのは、主として寛保四年、柏崎永以の奥書のあ

る兼好法師伝考に拠つたものであつて、同書には尚其の地方の見取図や墓面の図などもつけてある。けれども、私は之を単に一の伝説地として軽く見ておいたのみで、深く信を置かうとはしなかつた。が、この事は絶えず心にかかつてゐたのであるから、今遊を機会にせめて国見山でも遠望しておきたいと思つたのであるけれども、時間の切迫してゐた上に俄雨にさへ襲はれた為に、公園になつてゐる旧城址にも上らなかつたのであるから、それすら叶はなかつた。

然るにこんなことを支部長の神戸政孝君等に話しておいたものだから、同君が昨日の会にも出てをられた依那古の尋常高等小学校長の新佐業君に話されたさうで、後日に其の方から名賀郡の史学同好会で出来た兼好法師伝や其他の材料をも贈られた。

（中略）

私も一たびは機会を得て是非其の遺跡を弔ひ、且つは其の風光にも接したいと思ふのである。

これを読むと、種生の兼好伝説に対する当時の一般的な態度がわかる。現地を訪れたいと思ひながら、果たせないものである。それを一歩進めて、現地調査したのが富倉徳次郎であつたことになる。

⑦【斎藤栄の推理小説での種生】 それでは、現代文学においては、種生はどのように描かれているだろうか。斎藤栄の推理小説に『徒然草殺人事件』（昭和五十年二月刊・光文社、その後、昭和五十六年六月に集英社文庫刊、引用はこの文庫版による）という作品がある。この中に種生の兼好塚のことが次のように描かれている。

種生は、上野盆地の南はずれにある。ここは、北に鈴鹿国定公園をひかえ、南に室生、赤目、青山国定公園を望む景勝の地だが、土地そのものは、木材のほか、わずかな農産物をもつ寒村に過ぎない。

名古屋方面から、ここを訪ねるには、国鉄「松阪」の駅で、近鉄大阪線に乗りかえて、布引山地のある青山高原をトンネルでくぐりぬげなければならない。

東青山の駅は、聳え立つ山あいであり、ちよつと天候が悪ければ、もう霧に包まれてしまう。近鉄大阪線は、この駅からすぐに、標高八百メートルの南北に走る脊梁山脈を突っ切る。ここで、東と西の天候は、がらりと変わるのだ。

(中略)

その道路に沿って、地元では木津川、または深瀬川と呼んでいる川筋が蛇行している。川をひとつ渡って、常楽寺

という寺の前で、急な坂をのぼりつめたところが寄合所だった。

種生派出所は、この常楽寺の隣にある。南無大師遍照金剛という赤い旗を出した常楽寺は、かつて元祿のころ、『種生伝』の著者篠田厚敬がここへ納めたという兼好上人像があることで有名だ。

推理小説ということもあってか、このあたりの雰囲気や、暗く描き過ぎているように思われる。また、篠田厚敬が常楽寺に兼好の画像を納めたと書いているのは、誤りである。これに對して、次に紹介する森本哲郎の紀行文は、画像の伝来の経緯に触れている。

⑧【森本哲郎の紀行文】 森本哲郎の『ぼくの日本東西遊記』③（『Signature』一九九五年三月）の「兼好の墓」は、種生の兼好塚を訪れた時の紀行文である。現代でも文学者たちは兼好塚を目指して種生を訪れている資料として、ここに紹介したい。次に引用するのは、この紀行文の中から、主として種生の風景や兼好塚の描写がある部分である。

買い求めた古い地図で見ると、兼好の塚があるという「国見山の麓」の種生は、伊賀国名張郡にある。そこに、

かつて、草蒿寺という寺があつて、兼好の遺品(短尺)と、「兼好上人像」とが納められていたそうだが、納められたのは、時代がずつとさがった元禄のころだから、おそらくただの伝えにすぎまい。

だいいち、この寺は天正九年(一五八七)、織田信長によつて焼かれている。その後、江戸中期の宝永四年(一七〇六)に再建されたが、それも江戸末期の安政四年(一八五四)の大地震で崩壊して、いまはそこと知れる跡しかないらしい。さいわい、土佐光成筆という「兼好画像」と、兼好自筆とされる短尺は、近くの常楽寺に移されて現存しているのだが。(中略)

兼好が死んでから六百数十年、田山花袋がここを訪れてからも七十年近くの歳月が流れている。花袋が「阿保」という「停車場」を降りて、「丘と丘の重なり合つた、さびしい村から村へと伝つて」、さらにその「ずつと奥の奥にある」と書いた種生の風景は、とうぜん、変つてはいるだろう。しかし、兼好の墓といわれる塚があることだけはたしかなようだ。その塚は、どのようなたずまいを見せているのだろうか。(中略)

車をおりて、細い道をたどる。左手は畑、右手にポツンと一軒の農家。そこから梅林がつづいている。つき当りに小高い一叢の林が見えた。その林の手前に大きな石の碑が

あり「兼好終焉の地 草蒿寺跡」と彫られてあつた。落葉を踏んで丘にのぼる。傍らに、何やら書きつけた碑があるが、判読もできないほど古びており、読むのをあきらめて林に立つ。

そこ、ここに蜘蛛の糸が昨夜の雨滴をとどめて、キラキラ光っている。そして、その向うに、朽ちかけた木の柵が囲われた兼好の塚があつた。

ほくは長いこと、その兼好塚と向い合っていた。むろん、これが兼好の墓である根拠は何もない。昔から伝えられていた「けんこん(乾坤)塚」が、江戸時代の中ごろから、いつの間にか「兼好塚」になつたのだ、ともいう。長い間、忘れられていた兼好法師に、幾重にも伝説の衣を着せたのは、江戸の中期になつてからであつた。どれほど多くの「兼好伝」や「兼好物語」がつくられたことか。しかし、兼好の姿は、まさに、その中に生きてるのである。ほくは伝説や物語にこそ真実が隠されている、と確信する。なぜなら、あらゆる古典は「後世が書く」ものだからである。

森本哲郎の「兼好の墓」は、たんなる探訪記ではなく、彼の徒然草論であり、兼好論になつてゐる。森本が田山花袋の種生訪問記に言及しているのは注目されるが、花袋の全集を通覧しても、これに相当する作品は見出せなかつた。

森本哲郎は現代の文学者の中でも『徒然草』に関心が高く、『ぼくの日本十六景……空の名残』（新潮社・二〇〇一年五月）でも、その「プロローグ」で『徒然草』第二十段に触れている。

以上、種生を訪れた文学者や研究者たちの記述を紹介してきた。これらはどれも、種生の兼好旧跡をめぐる情景描写がかなり詳しく書かれており、また兼好を偲ぶ気持ちにも真摯なものが感じられる。今後ともさらに種生での兼好終焉伝説から派生したものを近世文学の世界のみならず、現代にいたるまでの文学作品や記録の中から探索してゆきたい。

子 裕 内 島

おわりに

本稿では、種生の兼好塚と常楽寺での現地調査をもとに、江戸時代の種生に関わる兼好伝と伊賀の地誌を概観し、あわせて服部土芳における兼好への思い、さらには近代から現代にいたる文学者や芸術家が種生を訪れ、兼好の旧跡にさまざまな感慨を抱いていること、そして地元での兼好顕彰の努力の跡を辿ってきた。これによって、江戸時代以来、伊賀種生における兼好終焉伝説への熱い思いが現代まで脈々として続いていることが明らかになったのではないだろうか。兼好伝説は、伊賀種生に

おいて、これからも生き続けてゆくであろうし、そのような観点からの研究の意義も大きいと思う。

最後になりましたが、今回の調査研究、およびその前後の時期も含めて、放送大学三重学習センター所長・作野史朗先生、種生常楽寺樋口有弘氏、三重県青山町教育長小竹紀忠氏をはじめとする、関係各位の多くの方々には、並々ならぬ御厚情を賜りました。ここに、心より深く御礼申し上げる次第です。また、資料を閲覧させていただきました国立国会図書館・東京大学史料編纂所に御礼申し上げます。

注

- (1) 拙稿「徒然草以後」（『国文学』・三四卷三号・平成元年三月）、「兼好伝説とその展開」（『日本の美学』第十五号・平成二年二月）。ともに後に拙著『徒然草の変貌』（ベリカン社・一九九二年）に所収。
 - (2) 富倉徳次郎著『兼好法師研究』（丁子屋書店・昭和十八年版、三十五頁。なお、本書は昭和十二年版に新資料による増補訂正を加えたものである）。
 - (3) 川平敏文『兼好上人像』と篠田厚敬（『日本古典文学会々報』一三三三号）。
 - (4) 注1拙稿
- (5) ただし、ここでは本文のみを翻刻し、『種生伝』の挿絵は省略した。なお、『種生伝』の翻刻は最近、川平敏文編注『近世兼好伝集成』（平凡社・二〇〇三年）にも収録され、ここでは挿絵も入っている。

- (6) 『国書人名辞典』第一卷(岩波書店・一九九三年)による。
- (7) 菊岡如幻編『伊水温故』(上野市古文文献刊行会・昭和五八年)、二八六頁。
- (8) 『大日本地誌大系・三国地誌下』(雄山閣・昭和七年)、八八頁・九一頁。
- (9) 兼好の和歌に言及している作品としては、木下長嘯子の『大原記』が挙げられる。長嘯子における『徒然草』や兼好和歌の撰取については、拙著『日本文学における住まい』(放送大学教育振興会・二〇〇四年三月)の第七章参照。
- (10) 川平敏文「兼好塚の文学……常楽寺所蔵・近世兼好伝資料解題」(『雅俗』第十号平成十五年一月)に全文が紹介されているものによった。
- (11) 注10論文による。
- (12) 沖森直三郎「歴史的文学史的資料としての兼好法師と伊賀文献考」(『伊賀郷土史研究』第六号)には、「一四、兼好法師家集 嘉永二年撰 全一冊/伊賀 入交守一校正書写本/兼好五百回忌に際し脱稿、明治二十四年 岡の屋の主人影刊」とあり、この本が紹介されている。ただし、明治二十四年とあるのは、明治三十四年の誤植であろう。
- 付記 本研究は、平成十五年度放送大学特別研究費による研究成果の一部である。

(平成十五年十一月十二日受理)

The Development of Kenko Legends around Tanao, Iga.

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

During the Edo period, it was generally believed that Kenko, the author of *Tsurezuregusa* or *Essays in Idleness*, spent his final years in Tanao, Iga. This Kenko legend is reflected in local topographies of Iga which record some of his episodes. His biography *Shuseiden* was also written, taking the name of the place.

There is a grave mound in Tanao which has been believed to be Kenko's. It has therefore been a sight of literary interest, attracting many authors and artists since the Edo period up to date, such as Doho Hattori, a disciple of Basho, and the painter Tessai Tomioka. Their journey and visit to Kenko's grave mound in Tanao were recorded as books or essays, which I would like to call 'Tanao Travel Writings' as a whole. This essay traces their development and lineage. A study of these travel records will clearly show that people had a strong interest not just in *Tsurezuregusa* as a literary work, but also in the author Kenko himself as a person.